

千代の散歩

作者：川崎ゆきお

概要：へたりこんでいる老婆がいる。

へたりこんでいる老婆がいる。

市街地での話だ。

これが農村なら休憩している姿も絵になるが、町中では背景が悪い。

野村千代は家までの道で止まってしまった。狭い裏道なので、車一台がギリギリ通れる幅しかない。したがって道端で腰を下ろすわけにはいけないので、マンションの階段に座り込んだ。

時間はまだ早いけど冬の陽は短い。夕食前の時間帯なのだが、もう町は暗い。

千代はじっと座ったまま体力の回復を待った。空腹で腹に力が入らない。このまま立てないのではないかと心配になる。

嫁が夕食をつくって待ってるはずだ。いつまでも座り込んでいるわけにはいけない。

通りがかった人が驚いたような顔をする。階段に見かけない物体がくっついており、よく見ると人間が座っているので、驚くのだろうか。

千代は頑張っけて立ち上がった。ぐずぐずしていると、もう一人で散歩に出してくれなくなる。

千代は歩きだした。

すると、ガレージに座っている人が見える。まだ車は戻って来ていない。

「梅子はんか？」

「あ、千代さん」

「あんたもか？」

「そうでんがな、もう歩けまへんねん」

「はあ、はあ、お互いはん。わても、その階段で、さっきまで」

「そうでっか、辛いこって」

「ああ、辛い辛い」

「立てまっか、梅子はん」

「さっき立とうとしたら、立ち眩みしましてなあ」

「梅子はんは目眩持ちやからなあ」

「そうでんがな、わて、もう怖うて怖うて」

「わては、膝があきまへんねん」

「よう言うは、しゃきしゃき歩いてはるやないか」

千代は梅子を支えながら立たせた。

「車が入って来たら、ひかれますからな。ここは危ない」

二人はとぼとぼ歩きだした。

その後ろから車が来ていた。二人は気づかない。自家用車の婦人が我慢の限界に来たのか、クラクションを短く鳴らした。

その音で千代の膝がガクンとなり、バタンと倒れた。

了